

実習を終えて

古澤 愛

今回の実習では小児医療に特に興味があり、その中でも小児の在宅医療をしている数少ない施設であるひばりクリニックを選ばせていただいた。これまで地域実習などをする機会も少なく実際に訪問診療などに同行させていただくことは初めてだった。また、「かいつぶり」や「うりずん」も見学させていただき、重い障がいがある方たちとどのように接するのか、スタッフの方たちを見て多くのことを学ぶことができた。

クリニックでの外来では幅広い年代の方がいらっしゃった。診察の中での一見診察とは関係ないと思われるような何気ない会話が患者さんの緊張を和らげるなど非常に重要な役割を果たしており、自分の話を聞いてもらえたという感覚が医師と患者の信頼関係を築く上でも大切だと感じた。また、小さな子どもの診察には声かけなどが大人とは異なり工夫が必要だった。先生や看護師の方たちが優しく笑顔で対応されているのが印象的だった。小さい子どもを連れてくる親にとってはどのような病気なのか、など不安な気持ちもあるだろうが、医師や看護師の声かけ一つで少しでも軽くすることが可能である。相手に不快な思いをさせずにどのように対応するのが一番良いのかをこれからもっと考えていく必要があると思った。

診察の合間に病児保育の説明や見学をさせていただいた。子どもは自分で体調管理をすることも難しいし、いきなり発熱した場合にやむを得ず仕事を休まなければならないことが多くあるということを知り、まだまだ育児と仕事を両立する環境が整っていないことを改めて感じた。具合が悪いのに自宅で親と過ごすことができず預けられてしまう子どもは不安であるし、預ける親にも罪悪感がある。そんな中でお昼のメニューや遊びの内容など子どもたちを楽しませるような工夫が至るところに見られた。今まで病児保育という存在自体をあまり聞いたこともなくどのようなものなのか考える機会はなかったが、今回実習で見学させていただく前は漠然となんとなく暗いイメージだった。しかし、保育士の方もその日に預けられていた子どももとても楽しそうに笑顔であふれており、今までの自分のイメージとは全く異なるものだった。子どもが楽しかったとポジティブなイメージを持ってくれることが親の罪悪感を減らすこともでき、双方にとってプラスになる。しかし、病児保育そのものがまだあまり知られておらず活用されていない。将来自分自身が医師となり、そして母親になったときに少なからず直面する問題である。これから先、ますます女性が社会に進出し活躍できる社会になっていくように、病児保育などが世間に広まっていけばと思う。

実習のなかで私が最も印象に残ったのは訪問診療と「うりずん」での実習だ。私が今回同行させていただいた訪問診療ではご年配の方の家庭が多かった。その中で感じたのは、

介護する方もされる方も共に年配の方が多ということだ。また介護される方には、周りの人に迷惑をかけて申し訳ないと感じている方が多くいるような気がした。介護はどちらか一方だけが辛いというわけではない。その心のケアも非常に重要であると改めて実感した。在宅での診療では寝たきりの方や介助なしでは動くことのできない方がほとんどで、家族だけでは手が回らない部分の方が多い。男性の介護においてはなおさらだ。そのような状況の中で訪問看護師の方、介護士の方、入浴介助の方など、在宅医療では多くの職種が関わっていた。医師にしかできないこともあるが、在宅医療においては医師のできることは本当に限られていると感じた。また、今回訪問させていただいたご家庭には呼吸器をつけている方が多くいらっしやった。小児でも大人でも呼吸器をつけている方の介護は本当にひと時もそばを離れることはできず、つきっきりの介護は心身ともに疲弊してしまうのではないかと思う。しかし、ご家族のみなさんはいつも笑顔で、私たちが訪問しても嫌な顔をせず笑顔で迎え入れてくださり、その方の症状や普段の様子を説明してくださった。もし自分が当事者となったときあんなふうに笑顔でいられるのか。簡単な言葉でしか表すことができないが、素直にすごいと思ったし、その心の大きさ、おおらかさ、強さは見習わなくてはならないと思った。また、筋ジストロフィーを患い体を思うように動かすことのできない方もいらっしやり、その方は私と同年代だった。知能には障害がなく、だんだんと自分の体が動かなくなっていくのを自分自身で実感してしまうのは想像ができないほど辛いものだ。先ほどと同じような感想になってしまうが同年代の私たちが訪ねたとき複雑な心境になると思う。それでもこのように聴診や血圧の測定などをさせていただき実習に協力してくださり、本当に感謝しなくてはならない。自分だけではなかなか病院に行くことができない方にとって、訪問診療は病院に行かなくても診察を受けることができるメリットがある。ただ聴診だけでも、大丈夫だということが分かれば本人も家族も安心できる部分があると思う。訪問診療をしている医療機関は私自身まだあまりみたことがない。これから先高齢化社会が進んでいけばますます訪問診療の必要性が増すのではないか。訪問診療により本人も家族も安心して医療を受けることができるような社会になっていけばいいと思う。

「うりずん」では日中一時支援、児童発達支援、放課後等デイサービスを見学させていただいた。児童発達支援では自分で意思表示をできる子もいれば、意思表示をするのがなかなか難しい子もいた。その子が何を求めているのか、分かってあげられない自分がもどかしかった。スタッフの方たちは障がいがある子とない子と変わらぬ接し方をしているように思えた。食事の時間などもつきっきりでいなければならないことも多く、またトイレなども一人で行くことができないので補助が必要である。これらを家だけでずっとするのは家族が休まる時間もなく、このような施設は家族が介護から離れ休む時間をつくるためには必要だということがよく分かった。日中一時支援はまた児童発達支援とは異なっていた。呼吸器をつけている方などより重い障がいがある方が多くさらに離れられない時間が多いように感じた。家からの移動だけでもかなりの負担があることが見ていただけで伝

わった。呼吸器や吸引に必要な道具などのバギーへの移動など一人ではできず、落ち着くまでかなりの時間がかかっていた。それでも子どもを外に連れて行ってあげたいというご両親の気持ちには頭が下がる思いだった。自分では動くことはできないけれど、目で合図をしたり顔をしかめたりと一生懸命に感情表現をしており、伝えたいという気持ちがこっちにまで伝わって来るようだった。

今回この実習では、どの場面でも皆さん笑顔を絶やすことはなくニコニコされているのがとても印象的だった。自分の立場を置き換えて考えたときにわたしは笑ってられないような気がしてしまった。きっと病気になり動けなくなってしまった方もその家族も、また障がいがある子どもをもつ家族もたくさん悩み、ときには泣いたこともあるかもしれないが、それを乗り越えてきた方々の笑顔はいつそうキラキラして見えた。世間からしたら障がいがあってかわいそう、家族は大変だというイメージが強いかもしれないが、必ずしも障がいがあるから幸せじゃない、健康だから幸せ、ということではないと思う。様々な家庭に訪問させていただいていろいろな家族の形を見ることができて自分自身の価値観が少し変わった。医師ができることは少なく、看護師、介護士など様々な職種ってこそ医療だと思う。将来医師となり多くの患者さんやそのご家族と接する中で今回の実習で学んだことを少しでも活かしていければと思う。

実習を受け入れて下さり貴重な経験をさせていただき、またクリニック、うりずんのスタッフの方々にはお気遣いいただき実りある1週間になったと思います。本当にありがとうございました。